

2025 年8月 10 日 聖霊降臨節 第 10 主日礼拝

メッセージ「今こそ恵みの時、救いの日」

牛田匡牧師

聖書 コリントの信徒への手紙Ⅱ 5 章 14 節－6 章2節

先週 8 月 6 日には広島で、昨日 9 日には長崎で、それぞれ原爆投下から 80 年目を迎えての「平和記念式典」が行われました。高齢化が進み、被爆者の方々の人数が減っていく中で、核兵器の使用という過ちが世界で二度と繰り返されてはならないということが、語り続けられています。しかし、その一方で、世界では今もなお戦争が続けられている現実、胸が痛みます。パレスチナのガザ地区の映像がテレビで報じられると、食べ物がなく、すっかりやせ細り、医療も受けられず、亡くなっていく人たち、とくに幼い命が奪われていくと聞くと、とても同じ 21 世紀の出来事とは思えません。それこそ 80 年前のナチスがユダヤ人たちを、強制収容所に閉じ込めた時の出来事ではないか、と目を疑わずにはられません。

広島と長崎に落とされた原爆よりも、はるかに破壊力の増した核兵器が、世界中にいくつも存在しています。そしてそれらによって、私たち人類の歴史は、いつ、突然に「強制終了」させられてもおかしくない状況です。いつでも人類の歴史を一斉に終わりにすることができる核兵器のボタンが、世界の権力者たちの手の中にある……。それが今の世界の現実です。全ての命は、神様が祝福された命であるにもかかわらず、いつどこで、誰かの気まぐれによって、全てが奪われるかもしれないという恐怖感。そのような状況の中では、「心の底から安心して生きる」ということ自体が、始めから無理な話なのではないかとすら思われています。

今回の聖書の言葉で、「今こそ恵みの時、今こそ、救いの日です」(6:2)という印象的な言葉があります。救いの日は「いつか来てほしい日、いつか来るかもしれない日」ではなく、他ならない「今日、今だ」という言葉ですが、この言葉は、果たして今、どれだけの人に実感をもって響くでしょうか。今もなお、空の上から爆弾が降って来ないか、周りからも銃口を向けられていないかを心配し、今日の食べ物と飲み水を得ることに必死になっている人たちにとっての「救いの日」とは、言うまでもなく、命が脅かされることなく、安心して食事がとれて、屋根の下で休める

日のことであるはずで。また戦争だけではなく、各地で豪雨や洪水、土砂災害の被害が出ていますが、それらの被災者の方々にとっても、「救い」とは、決して言葉だけの絵空事ではなく、実際の具体的な事柄であるはずで。にもかかわらず、聖書がこのように語っていることを、今日の私たちはどのように聞き、受け止めることができるでしょうか。

今回のパウロの手紙の中に、何度も登場している言葉が「和解」という言葉です。私たちの普段の生活の中ではあまり使わないかもしれませんが、分かりやすく言い換えれば、「仲直り」ということです。人間は神様によって創られ、命を与えられていますが、神様が望んでおられる生き方をせず、御心に従った歩みができずに、外れた道を歩んでしまうことがあります。それが「罪」と言われています。人間関係になぞらえて考えてみてもよいかと思いますが、二人の間でお互いにスムーズにコミュニケーションがとれていれば、何も問題はありません。しかし、何か相手に対して不都合なことや、望ましくないことがあると、後ろめたく感じたり、隠したり、嘘をついたりしてしまって、その結果として、コミュニケーションが滞ってしまうということがあるのではないのでしょうか。そうすると、相手の思いも素直に届きませんし、こちらの思いも相手に届かなくなってしまう。そのような断絶した関係性を修復、回復するのが、「和解」というわけです。

日本でも古代イスラエル社会でもそうですが、良いことがあるのは、良いことをしたからで、悪いことが起こるのは、悪いことをしたからだ、という「因果応報」の考え方が、世界中で昔からあります。そのような考え方によれば、神様との関係性が良好であれば、祝福されて恵まれて、良いことが起こるけれども、神様との関係が断絶していて、悪くなっていれば、呪われて、良くないことが起こる。だから、そのような断絶した状態、汚れた状態から、清めなければならない、清めることで再び関係性が回復して、和解することができる、というような発想になります。

しかし、イエス様はそのような神と人との断絶、隔絶した関係そのものに終止符を打たれました。そのような両者の間の「隔ての壁」を取り壊し、一つの体に連なるものとしてくださったわけです（エフェソ 2:14-18）。今回の手紙の言葉で言えば、5章14節にある「一人の方がすべての人のために死んでくださった以上、すべての人が死んだのです」、つまり「古い自分、古い関係性に死んだのです」と

いう言葉も、そのような神、イエス・キリストと人との一体性という考え方に基づいた言葉です。ですから、もはや「和解」に躍起になる必要はありませんし、「清め」や「謝罪」のような何らかの関係修復の行為も必要とはされません。

続く 15 節では、イエス様の十字架での死と、その後の死からの引き起こしの意味が説明されています。「その方がすべての人のために死んでくださったのは、生きている人々が、もはや自分たちのために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きるためです」。直訳では「自分たちのために死んで復活してくださった方によって、生かされているから」です。これは、17 節にもあるように、キリストと共にある人は、既に新しく造られた者、キリストと共に「復活の命」を新しく生かされている人だということです。

そしてその上で、私たちは神様から「和解の務め」(18)や、「使者の務め」(20)を授けられており、「神と共に働く者」(6:1)とされています。つまり、自身の中に神の命が生きていることに気付いていない人たちも含めて、全ての人の中に神の命が生きていること、それによって全ての人が生かされていることを証していく、そのための神の協力者として、使命を与えられているということです。

「神の恵みをいたずらに受けてはなりません」(6:1)とは、「神の恵みを無駄にしないように」という意味ですから、どのような状況にあっても、いつでも諦めないで、投げ出さないで、神の業を示し続けるということなのだと思います。

今回の箇所少し前になりますが、同じ「コリントの信徒への手紙Ⅱ」の 4 章 7-10 節には、次のような言葉があります。

⁷ 私たちは、この宝を土の器に納めています。計り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかになるためです。⁸ 私たちは、四方から苦難を受けても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、⁹ 迫害されても見捨てられず、倒されても滅びません。¹⁰ 私たちは、死にゆくイエスをいつもこの身に負っています。イエスの命がこの身に現れるためです。

私たちが生活している現実の社会は、決して良いことばかりではありません。「どうしてこんなことが起こるのか」「過去に何か悪いことをした罰が当たったのか」「神様に嫌われたからか。それとも呪われたのか」などと考えてしまうことも、誰に

でもあるのではないかと思います。しかし、神の恵みが全く感じられないような、そのような時であっても、復活の神の命は全ての人の中に生きています。神の命を受けているからこそ、今日も、今も生かされている、ということに他なりません。

ナチスのホロコースト、強制収容所での生活を生き延びた精神科医のビクトール・フランクルは、「我々が人生を問うのではなく、むしろ人生から問われている」という言葉を残しています。これは「私たちが人生に対して『どうしてこんな目に遭うのか』と意味を問うのではなく、むしろ私たちの方が人生から『あなたは今、どのように命を使うか』と問われている」という意味だと思います。

「救いの日」はどこか遠くにあつて、いつかは来てほしいと願う日ではなく、いつでもどこでも「今こそ、今日こそが」救いの日だ、ということです。十字架での死から引き起こされたイエス様の「復活の命」を、共に生かされている者は、自分が決して独りではないことを、神様から見放されているわけではない、ということを知っています。だからこそ「四方から苦難を受けても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、迫害されても見捨てられず、倒されても滅びません」（Ⅱコリント 4:8-9）。

今、この状況の中で、「恵み」とは何か、また「救い」とは何か。そのことを考え、受け止め、また自分にできることを考え、自分がなすべきことを探る。それが今、求められているのではないかと思います。戦争と平和について思いを馳せつつ、また地震や豪雨などの災害の被災地にも思いを寄せつつ、私たちは身近から小さな平和を作り出す務めへと今日も導かれていきます。